

V-1 横浜市における総合的な学習の授業と評価の工夫

(1) 本市としての総合的な学習への取り組み

①最近の研究動向

本市では、平成14年度から本格実施となった「総合的な学習の時間」について、その趣旨に即して創意工夫しながら実践に取り組んでいるところである。

小学校においては、校内の重点研究の柱として位置付け、実践的な研究を推進している学校が多く、その中で様々な成果と課題が明らかになってきている。成果としては、子どもが課題をもち、自ら調べ・まとめ・発表する力、思考力・表現力、学び方などの力が付いたなどの意見も聞かれている。

また、総合的な学習を実践することによって、地域の社会教育施設や経験豊かな地域人材の活用などの機会が増え、様々な形で保護者や地域住民等との連携・協力が図れるようになってきたとの声も聞かれている。

その一方で、教科等とは異なり、学習指導要領に「目標」「内容」が示されていないため、教師個人の負担が大きいことや、単元を開発していくことの難しさもあげられている。そのため、学校の総合的な学習の時間の全体計画の必要性が求められている。

中学校においては、小学校とは異なった体制の中で、学校の教育課程の中にどのように位置付けていくのかという研究が多く学校の学校でなされた。その結果、従来行ってきた学校行事を総合的な学習として「ねらい」「内容」を見直し、学年単位で実践していくという学校が多い。従来の学校行事と比較して、時間的なゆとりも増えたことから、活動内容の幅が広がり、子どもがさらに意欲的に活動に取り組むようになったなどの成果があげられている。

その一方で、実践されている活動が本来の総合的な学習の時間のねらいの実現に向いていないのではないか、子どもの主体的な学習になっていないのではないかなど、活動内容そのものに疑問をもつ声もあがってきている。

評価に関しては、小・中ともに、観点、趣旨、規準の設定まではできている学校がほとんどであるが、具体的に活動過程でそれらを活用し、指導の改善までどのように結び付けていくのかなどの具体的な研究については、今後の課題である。

②「内容系列表」の作成

総合的な学習の時間は、国が「目標」「内容」等を示す教科等と比較し、学習指導要領にはねらいと課題例があげられているだけである。

そこで、各学校では、これらの課題例を参考にしながら、子どもの生活実態、教師や保護者、地域の願い等を考慮し、単元を開発し実践してきた。このような実践の中で、次のようなことが課題として見えてきた。

○活動や内容が各指導者に任され、学校としての基本的な考え方がないため、活動や内容の学年相互の系統性が図れない。

○単元を開発していく際の拠り所としては、学習指導要領に例示されている課題しかないため、活動内容が地域や子どもの実態を生かしたものにならず、子どもの

生活改善に結び付かない。

○学校としての方針が明確になっていない中で授業を展開しているため、地域・保護者にその活動内容の必然性や子どもに育てたい資質や能力について、指導者が説明できない。

平成15年10月には、中央教育審議会から出された「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」の総合的な学習の時間の現状と実施上の課題等の中にも「具体的な『目標』や『内容』を明確に設定せずに活動を実施し、必要な力が児童生徒に身に付いたか否かの検証・評価が十分に行われていない実態や、教科との関連に十分配慮していない実態、教科の時間への転用なども指摘されているところである。このほか、児童生徒の主体性や興味・関心を重視するあまり、教員が児童生徒に対して必要かつ適切な指導を実施せず、教育的な効果が十分にあがっていない取組も指摘されているなど、……」(pp16)として計画性の指導の必要性に向けての課題が提言されている。

具体的には、「…各学年の『目標』・『内容』を含めて『総合的な学習の時間』についての『学校としての全体計画』を作成し、具体的な指導の改善、評価の在り方、学年間・学校段階間の連携、円滑な実施のための指導体制等について、自己評価を実施すること等により取組内容を不断に検証するとともに、学校間で実施上の情報や意見の交換を行うことが考えられる。また、指導に当たっては、…教員が明確な目標及び内容を設定して行き届いた指導を行うこと…」(pp17)とし、学校としての「目標」「内容」の設定の必要性が提言されている。

本市における実践上の課題からも、同様のことが求められ、各学校が内容系列を作成することが急務である。

③本市としての「内容系列表」作成の取組とその特質

本市は、平成11、12年度の調査研究「新しい教育課程の創造をめざす研究」(以下、「調査研究」と略記)の中で、新学習指導要領移行期における総合的な学習の時間の取組の様子について分析をした。その調査結果からは、内容編成を明確に設定している学校はほとんどなく、実践内容も「環境に関する課題」が多いなど偏った傾向が見られた。全体的な傾向として、総合的な学習の時間で、どのような資質や能力を子どもに身に付けさせようとするのかといった目標や内容が具体化されずに、単元開発がされているという実態が示された。

そこで、平成13年度に同「調査研究」において、内容系列作成に向けた参考資料として高浦勝義氏に御指導をいただきながら、「例示課題内容分析」を行い、さらに本市の教育の理念を示した「新よこはま教育プラン」(以下、「新プラン」と言う)の考え方を入れて「内容系列表作成に向けた参考資料」を提示した。

内容編成 (成長課題の観点)		興味・関心・意識の広がり、認識の系統性										中学年 (3.4年) <児童後期>	高学年 (5.6年) <青年前期>	中学校 (1~3年) <青年中期>	
		10の学習課題													
		横	学	共	選	評	個	解	心	自	生				
		浜	合	生	択	価	性	決	体	立	活				
国際的総合的な課題	ア 異文化を理解し、尊重する態度 (14)(17)(22)	○	○					○	○	○			・外国の文化や人に進んで親しむ。	・世界中の国々に様々な文化や特色があることを知り、視野を広げる。	・他国への文化や歴史への関心を高めるとともに、それを尊重する。
	イ 異文化にくらす人々と共生する資質や能力 (14)(17)(22)	○	○	○				○	○	○			・人とのかかわり方を学ぶ。	・様々な考えをもった人と積極的に交流する。	・異なる考えや立場の人、外国の人と協調し活動する。
	ウ 地域や我が国の歴史と伝統文化への理解と、個人としての自己の確立(14)(17)(22)	○	○		○			○	○				・「まち」の文化や先人の業績、歴史などを調べ、興味・関心をもつ。	・日本の歴史や文化、伝統について学び、大切にする。	・日本人としての自覚をもって自国をみつめる。
	エ 外国語によるコミュニケーション能力 (14)(17)(22)	○	○					○	○				・外国人とのふれあいを通して、外国語の音声や意味に興味・関心をもつ。	・外国人とのふれあいを通して、外国語による簡単な日常会話に慣れ親しむ。	・外国語によるコミュニケーションを図る。
環境	ア 自然への豊かな感性、環境への関心 (6)(16)	○	○					○	○	○			・「まち」の自然環境にふさわしい活動を通して、様々な事象があることに気付き、素直に感じ取る。	・「まち」の自然環境や地球環境問題に関心をもち、自然と共生について考える。	・身近な自然環境や環境問題の認識を深める。
	イ 環境問題、社会経済システムと生活様式とのかわりについての理解 (6)(16)(20)(23)	○	○		○			○	○		○	○	・自分たちの生活と周りの環境との間には関連性があることに気づく。	・環境とのかかわりの視点で自分たちの生活を見直し、関連性について理解する。	・人間社会の営みが環境に影響を及ぼしていることを理解し、産業と自然環境のあるべき姿を考える。
	ウ 環境の保全やよりよい環境の創造のために主体的に行動する実践的な資質や能力、態度 (6)(16)(20)(23)	○	○		○			○	○	○			・身近な自然環境の保全に向けて自分のできることを探し、働きかける。	・環境保全や改善にむけて自分たちの生活を見直し、できることから行動する。	・環境に配慮した生活スタイルを家庭や地域で実践する。
福祉・健康	ア 自分たちが高齢者になったとき、充実した生活を送るための基礎 (1)(6)(8)(14)(18)	○	○					○	○		○		・自分の好きなことや得意なことに興味・関心をもち伸ばすとともに、自分と友達との相違に気付く。	・自分のよさや可能性に気付き、それらをより高めるとともに、自他のよさを認める。	・自他を尊重し、個性を發揮しながら自分の生き方を考える。
	イ 他者を尊重する態度と、他者を思いやる豊かな人間性 (1)(6)(15)(17)(18)	○	○					○	○	○			・「まち」の人や施設とのかかわりを通して、温かい気持ちで接するようにする。	・様々な交流を通して違いの近さを認め、他者への思いやりを大切にす。	・共に生きる社会の実現のために、進んでかかわっていく。
	ウ 高齢社会の特質、問題点の理解と、高齢社会	○	○	○				○	○				・様々な立場や願いがあることに気付き、自分	・様々な立場の人の考え方を理解し、支え合い	・社会に貢献する活動の大切さを知り、福祉の

	の課題への考え (①⑥⑬⑰⑱⑲)						のできることを 考え活動する。	や福祉の大切さ を考え、進んで かかわれる。	向上について考 える。	
	エ 心身の健康と 安全への理解と 実践できる能力 や態度 (①⑥⑧⑨⑩⑫)	○			○	○	・体全体の感覚 を働かせ、もて る力を十分に発 揮し、自分らし い表現を楽し む。	・自分の体を見 つめ、健康な生 活について考え 実践する。	・自らの健康を 適切に管理し、 健康の保持増進 のために積極的 に運動に親しみ 実践する。	
	情報教育 ア 情報の科学的 な理解と情報社 会へ参画する態 度(③④⑦⑲⑳)	○			○	○	・友達やまちの 人の考えや図書 資料等を取り入 れて、多様な方 法で問題解決を 図る。	・図書資料やま ちの人だけでな く、コンピュー タ等から情報を 集め新しい解決 方法を取り入れ ながら、よい問 題解決を図る。	・よりよく問題 解決をするため に、必要な情 報を収集し、活 用しながらより 高い課題をつか み、実現の期待 をもつ。	
子どもの 興味関心	製作 ア 芸術・芸術作 品の創造と鑑 賞、ものの表現、 製作的な活動の おもしろさや楽 しさ(①⑤⑭⑯)	○			○	○	・自然や人とふ れあいながら、 興味あることや 感動したことを 夢中になって表 現する。	・友達とのかか わりあいの中で、 互いに認め合い、 高め合いながら、 創造的に表現す る。	・個性を自覚 し、自分らしさ を発揮して、思 いを表現する。	
	遊び イ 生産・遊び、 趣味・娯楽にか かわる活動のお もしろさや楽し さ(①⑤⑥⑭⑯)	○			○	○	・自然や動植物 の生長のすばら しさを素直に感 じ取ったり、自 分の興味あるこ とに楽しんで取 り組んだりする。	・自然や動植物 の生長のすばら しさへの感動を 自分のやり方で 表現したり、自 分らしさを生か して活動したり する。	・自分にとって 価値あるものを 大切にして自分 らしさを伸ばす とともに、人の 感じ方や表現を 尊重し合う。	
	進路 ア 労働や職業の 意味等の理解と、 自己の適性、 進路選択にかか わる能力や態度 (①②⑭⑲)	○		○		○	○	・身近な人々の 職業を知った り、理解したり する。	・身近な人々と ふれあい、体験 を通じた学びの 中で、自分のよ さや可能性を見 だし、将来の 夢をもつ。	・自分の生活を みつめ、自分の 力を生かして社 会の貢献する方 向性をもつ。
地域 や 学 校 特色	地域 ア 家庭や地域の 伝統・文化・行 事・生活習慣へ の理解と進展に 努める能力や態 度(⑫⑭⑰⑳⑲)	○	○		○	○	○	・「まち」や家 庭の伝統、文化、 行事に喜んで参 加し、そのよさ に気づく。	・「まち」や家 庭の伝統や文化、 行事や生活習慣 の意味を理解し、 「まち」の活動 に、その一員と して進んで参加 する。	・「まち」や家 庭の伝統や文 化、行事などを、 歴史や国及び国 際的な視野から 理解し、家族や 「まち」の一員 として進んでそ のよさを残そう とする。
	学校 イ 地域の政治・ 経済・産業への 理解や解決進展 に努める能力や 態度 (⑫⑭⑰⑳⑲)	○	○		○	○	○	・「まち」の社 会的な現状と自 分の生活とのか かわりに気づき、 かかわりの在り 方を理解する。	・「まち」の問 題点を理解し、 その改善に向け て進んで参画す る。	・「まち」の政 治・経済等の特 色と問題点を理 解し、その改善 を図る活動に進 んで参画する。
	学校 ア 学級・学校行 事、生活上の問題 への理解と解決・ 進展に努める能 力や態度 (①②⑭⑰⑳⑲)	○			○	○	○	・学級・学校で の様々な活動に 進んで取り組 み、友達ととも に活動を工夫し たり、楽しんだ りする。	・学級・学校行 事にリーダーと して参加し、様 々な問題を理解 し、その進展や 解決に努める。	・学級・学校行 事に友達と設 局的にかかわり、 広い視野から様 々な問題を理解 し、その進展や 解決に努める。

なお、ここにある「内容系列作成に向けた参考資料」は、各学校が、それぞれの学校教育目標の下で独自の内容編成をしていく際に、考え方のベースとして活用できるよう「学習指導要領」の総合的な学習の時間のねらいや例示課題及び「新よこはま教育プラン」の「生き方の教育」の考え方を土台として作成したものである。この表で言う内容編成の中に記されている「成長課題の観点」(○数字)は、「新プラン」において子ども自身が自ら成長していくためにもつ自分の課題とし、教師が子どもを見ていくときの一つの手がかりととらえている。なお、この成長課題は、「新プラン」において子どもの成長過程に応じて23設定されている。

また、「10の学習課題」とは、「生き方の教育」を推進していくための課題とし、各学校が学習活動を展開していくための視点ととらえる。丸印は、総合的な学習の時間の内容が、主にどの課題と関連しているかを示している。

(2) 実践校の紹介

《横浜市立千秀小学校》

①〒244-0841 神奈川県横浜市栄区田谷町1832番地

【学年別学級数及び児童数】

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	個別支援級
学級数	1	1	1	1	1	2	2
児童数	32	37	36	35	33	45	2

【現在の教職員別人数】

校長	副校長	教諭	養護教諭	事務主査	技術員	調理員	非常勤講師
1	1	11	1	1	2	2	1

②学校の沿革

- 明治 6年11月 公立小学千秀学校として田谷村に開校
校名には、「千のことに秀でた人材を育成したい」という、地域の人々の願いが込められている。
- 23年10月 鎌倉郡長尾村立千秀小学校と改称
- 昭和14年 4月 横浜市豊田尋常高等小学校田谷分教場となる
- 昭和22年 8月 学校教育法施行により、横浜市立豊田小学校田谷分校となる。
- 昭和41年 4月 横浜市立千秀小学校として再び開校
- 昭和52年 横浜市教育内容方法開発研究協力校(道徳・特別活動)
- 昭和60・61年 横浜市教育課程研究協力校として研究発表(特別活動)
- 昭和63年 横浜市教育委員会研究協力校として研究発表
(道徳・創意ある教育活動)
- 平成 9年 2月 横浜市人権教育実践推進校研究発表
- 平成11年 9月 全日本歯科保健優良校表彰
- 平成14年 横浜市教育委員会教育課程開発実践推進校

③総合的な学習への取り組み

<1>最近の研究動向

本校は、子どもの行動目標を「すこやかに、であう、ふれあう、学びあう」とし、これを通して子どもが自己実現を図り、「生きる力」を培っていくことができることを学校づくりの基本に据えている。地域環境は、都市化の進展が著しい横浜の中でも最も自然が残っている地域で、人々に暖かく支えられながら伸び伸びと生活している。この行動目標は、このような環境で過ごす本校の子どもが、「人」「自然」「もの」「社会」との豊かなかかわりを持ち、心身共にすこやかに成長してほしいという願いが込められている。そして、子どもが自分で問題を見付け、解決方法を考え、創造的に活動することや、異学年や地域の人々などとのふれあいから、互いのよさを認め合い、共に生きていく子どもを育てたいと考えている。これは、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。」「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。」という「総合的な学習の時間」のねらいに合致するものである。

そこで、本校では、昨年度「自分の思いを素直に表現し、互いに学び合うことを通して生きる力を培う学習のあり方」のテーマのもと、総合的な学習の時間「ゆりの木タイム」と生活科の単元づくりについて研究を進めてきた。

昨年度の成果としては、地域の特色を生かした単元開発や、子どもの思い、教師の願いなどを大切にしたい単元構成を図ることで、生き生きと取り組む子どもの姿を見ることができた。また、指導計画の中に評価の計画も位置付けることで、子ども一人一人の興味や関心、思考の流れをていねいに見ていき、学習展開に生かそうという取り組みも見られた。

その一方で、いくつかの課題も残された。

一つ目は、「さらなる単元開発」である。昨年度の研究で、地域の特色や子どもの実態を生かした新しい単元づくりが進んだことは前述の通りだが、まだまだ十分とは言えない。子どもの興味・関心や知的好奇心及び意欲が高まるような単元の開発を継続して行っていくこと、特に地域素材の掘り起こしや、地域の教育力を生かした取り組みなど、地域を再度見つめ直す必要があると思われる。

二つ目は、「より確かな年間計画の作成」である。昨年度も、他教科等との関連も図りながら、「総合的な学習の時間」の年間計画を作成し、実践を進めてきた。しかし、年度当初での子どもの実態のみととり、「一年間でどのような力を子どもにつけたいのか」というねらいが今一つ不明確だったためか、教師のねらいと子どもの興味・関心との間にズレが生じてしまい、結果としてそれが見通しの甘さとして表れてしまったことがあった。実際の学習に「生きてはたらく」年間計画にしていくにはどのようにしたらよいか、さらに検討していく必要があると思われる。

三つ目は、「評価」である。学級の子どものをどのようにみとめるのか、みとったことをどのように生かすのかなど、評価についての私たちの悩みはつきることがない。私たちの評価観を今一度問い直すとともに、評価の改善を図ることが、授業の改善につながっていくと考えている。

以上、昨年度の研究の成果と課題について振り返ってみたが、これらを本校の子どもの実態や身に付けたい力と併せ、今年度の研究の基本的な柱として位置付けることにした。

そこで、今年度の研究テーマを「子どもが本気になって取り組み、やり遂げることができた自分を感じるために ～“ゆりの木タイム”の単元開発と評価のあり方～」とした。子どもが「どうしても解決したい。」「どうにかして調べることはできないかな。」「絶対に最後までやり遂げたい。」と思うような学習、すなわち、子どもが「本気になって取り組む」学習を目指したいと考えたのである。そして、このような学習を積み重ねることを通して、最後までやり遂げた充実感、成就感を味わえるようにすることが、自分を見つめ直し、「新たな自分」の発見へとつながっていくものと思わる。常に「本気になって取り組む」子どもの姿を念頭に置き、総合的な学習の時間「ゆりの木タイム」と生活科の単元開発や学習展開、評価のあり方を考えていくこととした。

< 2 > 「内容系列表」の作成

本校では、横浜らしい総合的な学習の時間を創造するため、子ども一人一人が学習活動を通して「新プラン」が言う「成長課題」の実現を図り、自分で自分の生き方を切り拓いていけるようにすること、「まち」とともに歩む学校づくりの視点に立つこと、学校の教育課程全体計画に位置付け、学校教育目標との関連を明らかにすることなどを念頭に置き、総合的な学習の時間の「全体計画」を作成した。

さらに、本校の総合的な学習の時間の目標を具現化するための視点として、「新プラン」の「10の学習課題」の中から「解決」「学び合い」「共生」を3つの柱として設定した。学習内容の視点は、本市として示された「内容系列作成に向けた参考資料」を参考に、本校の子ども及び地域の実態、保護者の願いなどを考慮しながら編成していった。これを、生活科との関連も考えながら、3・4年、5・6年のくくりで内容系列として具体化していった。この内容系列表を作成・活用することによって、子どもの成長過程に応じた、系統的な教育活動が展開できるようにした。

また、内容の視点として位置付けた「人権・福祉」「文化・歴史」「自然・環境」のすべてにおいて本校として身に付けさせたい力として、「コミュニケーション能力」を取り上げた。内容系列表の表記においては、すべての内容の視点を支えるというイメージで位置付けた。これは、本校の子どもの実態を考え、「コミュニケーション能力」をすべての学習を通して身に付けたい力としたものである。どの内容においても、「人」とふれあい、生き方に学ぶことを大切にするとともに、自分を上手に表現できたことによる満足感、自己肯定感を味わえるようにすることが、より豊かな自己実現につながるものと考えた。

以上のような作成の手順、基本的な考え方のもとに内容系列表を作成したが、ここに掲載したものはまだ作成途中のものであり、実践を通してさらに改善していくことが必要であると考え。今後、研究を進める中でその内容や系統性が本校の子どもに適切なものなのかを検証しながら、さらに改善を図っていきたい。

学習課題	学年				
	内容の視点と成長課題				
<div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright; border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;"> 解決 学び合い 共生 </div>	人権・福祉	3・4年生	ね 「まち」の人や施設とのかかわりを通して、様々な立場や違いがあることに気付き、自分のできることを考え、行動しようとする。	5・6年生	ね 「まち」の様々な立場の人の考え方を理解し、支え合いや福祉の大切さを考え、進んでかかわろうとする。
		a 豊かな人権感覚 b 自分らしさの発揮 c 交流・ボランティア・社会貢献	a 様々な立場や願いがあることに気付き、互いを理解する。 b 自分の好きなどところを見付け、夢中になったり伸ばしたりする。 c 様々な交流を通し、相手の思いを理解し、自分ができるところから実行する。	a 身のまわりにある偏見や差別に気付くとともに、認め合い、支え合う。 b 自分のよさや可能性に気付き、将来の夢をもつ。 c 様々な立場の人々の考えを理解し、社会に貢献する活動について考え、自分から進んでかかわっていく。	
	文化・歴史	3・4年生	ね 「まち」の文化・歴史と自分の生活との関連に気付き、自分らしい方法でかかわろうとする。	5・6年生	ね 「まち」と自分の生活とのかかわりの中から問題点を理解し、広めたり改善したりするために、進んで活動しようとする。
		d 身近な地域社会へのかかわり e 国際化に対するかかわり f 変化する社会へのかかわり	d まちの文化や歴史などを調べることを通して関心をもち、身近な地域にあるもののよさに気付く。 e 様々な国の文化にふれ、親しみをもつ。 f 地域の特色や、これからのよりよい地域社会の在り方に関心をもち、自分なりにかかわる。	d 地域や我が国の文化について学び、身近な地域にあるものを大切にしていく。 e 異なる文化への関心を高めるとともに、日本の文化のよさに気付き、尊重する。 f 地域の特色に気付き、これからのよりよい地域社会の在り方について考え、働きかける。	
	生命・自然	3・4年生	ね 「まち」の環境と自分の生活に様々な関連があることに気付き、自分にできることを探し、働きかけようとする。	5・6年生	ね 「まち」の環境に関心をもち、環境保全や改善に向けて自分たちの生活を見直し、できることから行動しようとする。
		g 生きる喜びの実感 h 自然環境への関心 i 健康管理	g 身近な人や動植物の成長や死を実感し、生命あるものを大切にする。 h 「まち」の自然に触れる生活を通して、様々な事象があることに気付く。 i 自分の心を体を見つめ、自分の健康に関心をもちとともに、安全な生活を送る。	g 生命はかけがえのないものであることを実感し、自他の生命を尊重する。 h 「まち」や日本・地域などの環境問題について関心をもち。 i 自分の心と体を見つめ、健康な生活について考えるとともに、危険を予知し適切な対応をする。	
	コミュニケーション能力	3・4年生のねらい		5・6年生のねらい	
		◎様々な人と共に行動することを通して、問題解決のための情報を収集・選択し、考えを伝えたり受け止めたりする。 ・情報を収集・選択し、自分の興味ある問題の解決に向かって進んでかかわる。 ・自分と友達の違いや似ているところに気付き、自他とよさを認める。 ・学校行事に進んでかかわり、その活動を通して仲間をつくる。		◎お互いの意見を尊重しながら、問題解決のための情報を収集・分析してよりよいものを考え、伝えることを通して友好関係を広げ人間関係を築く。 ・情報を収集・分析し、身近な問題について見通しをもって考える。 ・自分のよさや可能性に気付き、そそれをより高める。 ・学校行事を主体的に運営・実施し、その活動を通して異学年の仲間をつくる。	

《横浜市立老松中学校》

①〒220-0032 神奈川県横浜市西区老松中27番地

【学年別生徒数】

	1 学年	2 学年	3 学年	計
学級数	4	4	5	13
生徒数	147	146	163	456

【教職員別人数】

校長	副校長	教諭	養護教諭	事務職員	技能吏員	合計
1	1	22	1	1	2	28

②学校の沿革

昭和22年の創立した本校は、おおむね横浜市の中心部に位置している。校地は、その半ばが動物園と児童遊園地と併せ持つ野毛山公園に隣接し、市街の騒音から守られ四季こもごも咲き香る花木とともに作りなす閑静な趣は、あたかも「森の学校」の観がある。近くに市立・県立図書館、県立音楽堂、県立青少年センター、県立能楽堂等の文教施設が集積しているほか、歴史資源も多く、市内でも有数の文化ゾーンを形成している。この丘陵にたつ本校からは、国際港湾都市横浜の景観が一望のうちにおさめられるという環境は、まことに恵まれているというほかはない。丘を南に下れば、賑やかな野毛通り、市内随一の繁華街伊勢佐木町へ、北は横浜駅西口の新興商店街に近接している。まことに広い地域を学区としている。

③総合的な学習への取り組み

<1>最近の研究動向

本校では、総合的な学習の時間の名称をMMO21（みなとみらいおいまつ21）とし、研究テーマを、「生きがいを見出し、自らを生き抜く力を育む総合的な学習の時間の創造」と設定し、学年ティーム・ティーティングで取り組み、生徒とともに単元を作り出しながら、研究を進めてきた。

総合的な学習の時間のねらいが、思春期の中で揺れ動く多感な中で、生徒の自己の生き方を深め、実践することにあると考え、生徒指導上の以下の問題もまた、総合的な学習の時間の学習を通して、同時に解決することをめざすよう展開をしてきた。

また、具体的な単元指導計画を考える上で、重要視したい二つの視点を設定した。

○生徒指導上の問題

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 遅い自立 ② 友人の同質化（人間関係の希薄化） ③ 自己表現の貧困さ（コミュニケーション能力の低下） ④ 規範意識の低下（社会性のなさ） |
|---|

○重要視したい二つの視点

- ◆ 人との豊かなかかわりを通して自らの生き方を深める

◆体験的な活動の重視（体験して学ぶ）

< 2 > 「内容系列表」の作成

当初は学年別テーマを設定して学習を展開してきたが、取り組みを重ねるうちに、中学校3年間を見通した中で、生徒の発達段階に応じた4つのテーマを設定し、学習を展開している。4つのテーマから、それにかかわるキーワードを出し、さらにそこから内容を設定した。学年の欄には、その内容の重点化の軽重を記した。

今後、この内容を学年の発達過程に応じて系統的に考えていくために、生徒の実態や保護者、地域の願い等を考慮しながら実践を重ね、学年ごとの軽重の部分を文章化していくことによって、本校の内容系列表を作成していきたい。

平成15年度「総合的な学習の時間」の内容系列表

横浜市立老松中学校

4つのテーマ	キーワード	内 容	1年	2年	3年
環境	ま ち	・まちの生活の理解及びまちへの愛着を深める態度の育成	◎		
	自然環境	・様々な体験活動を通して、自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心 ・環境問題と社会経済システムの在り方や生活様式とのかかわりについての理解 ・環境の保全やよりよい環境の創造のために主体的に行動する実践的な態度の育成	◎ ○ ○		○
生き方・社会	社会性	・心身ともに健康で安全な生活について理解を深め、実践することができる能力や態度の育成 ・労働や職業の意義について理解を深めるとともに、規範意識の向上	○ ○	○ ◎	○ ○
	自己と進路	・まちの人とのつながりを大切に、主体的に生き方を学ぶ態度の育成 ・自己の適性の発見や進路の選択にかかわる能力や態度の育成	○	◎ ○	◎ ◎
文化財に学ぶ	文化遺産	・文化財保護の意義や文化財への関心 ・地域や我が国の歴史や伝統、文化の理解及び個人としての自己の確立		◎ ○	○ ◎
共生	国際理解	・国際社会の一員としてともに生きる資質や態度の育成 ・国際ボランティアの理解と実践的な態度の育成			○ ○
	福祉	・高齢化社会・少子化社会への理解と乳幼児や高齢者の方を尊重する態度の育成 ・福祉体験や高齢者や乳幼児との交流を通して豊かな人間性			○ ○
	成長への喜び	・自己の心身の成長を実感し、他者との間に豊かな人間関係を築くことができる能力や態度の育成			◎
	社会貢献	・健康・安全・環境・福祉の大切さを理解し、社会に貢献する実践的な態度の育成			◎

(3) 年間指導計画の作成

年間指導計画を作成するに当たっては、子どもの活動に対する思いや願いを大事にしながらも、各学校で作成した「内容系列表」を基に、その単元で指導する内容を計画する。その際に、特に留意したいこととして、子どもの活動をより豊かで多様なものにしていくために、単元と内容が1対1対応ではなく、同じ内容であっても、子どもや地域の実態から多様な単元開発ができるように考えたい。

また、生活科と同様に、一つの単元の中で複数の内容が指導できるという考え方を基盤においた。

本市の実践校である千秀小学校、老松中学校では、次に示すような年間指導計画を作成している。両校とも、「指導時期(月)」「単元名」「内容系列との関係」「評価規準」を項立てとして作成している。「単元名」については、子どもの問題解決の方向性が見えるような単元名を設定することに留意している。また、「単元目標」については、「内容系列表」から指導したい複数の内容を設定すると同時に、それらをその単元の特質に沿った内容に具体化し、一文で表すこととした。さらに、「単元の評価規準」については、単元目標及び内容系列表の内容を4観点に分析し、設定している。

《横浜市立千秀小学校の年間単元指導計画》

千秀小学校の年間指導計画は、次のような点が見られる。

一つには、学校の規模が小規模(6年生は2学級あとは単級)であるため、4年生と5年生が合同で同じ単元を実践している。その際には、子どもの発達の特性に合った単元目標や評価規準が設定されている。

二つには、年間に扱う単元の数については、6年生以外は各学期ごとに3つの単元を構想しているが、内容を見ると、3・4・5年生は単元名は異なるが、2学期から同じテーマを継続していることが分かる。6年生は、各単元が独立して継起する継起型である。

【3年生】

月	単元	単元の目標	内容系列表との関係	単元の評価規準
4月～7月	3年生の木の杏の木の四季の様子を調べたり、料理法を調べたりして食べる活動や、まちにある実のなる木や利用法を調べる活動を通して、自分たちが自然の恵みをいただいていることに気づき、感謝の気持ちをもつことができるようになる。	(生きる喜びの実感) ・身近な人や動植物の成長や死を実感し、生命あるものを大切にする。 (自然環境への関心) ・「まち」の自然に触れる生活を通して、様々な事象があることに気付く。	○関心・意欲・態度 ①杏を使った料理に興味をもち、料理の種類や作り方を進んで聞いたり、調べたりしようとする。 ②植物の成長や変化に興味をもって見つめ、自然の恵みに感謝し、大切にしようとする。 ○思考・判断 ①校内や地域の実のなる木やその利用法について調べたことをもとに、自分たちの食生活やくらしと関連付けて考えることができる。 ○技能・表現 ①実のなる木や杏の料理法について、調べたことを分かりやすくまとめ、伝え合うことができる。 ○知識・理解 ①校内にある実のなる木や杏の木の1年間の様子をとらえることができる。 ②校内や地域には、杏の他にも実のなる木がたくさんあることを知り、自分たちが	

				それらの恵みをいただいて暮らしていることを理解することができる。
9月～11月	ようこそ3つのファームへ	大根を育てる活動を通して、粘り強く問題を解決し目的を達成する喜びを味わうとともに、まちの特色である農業に携わる人たちの思い・工夫・苦勞にふれ、まちを身近に感じることができるようになる。	(生きる喜びの実感) ・身近な人や動植物の成長や死を実感し、生命あるものを大切にする。 (身近な地域社会へのかかわり) ・まちの文化や歴史などを調べることを通して関心をもち、身近な地域にあるもののよさに気付く。	○関心・意欲・態度 ①野菜の成長に願いをもち、栽培活動に積極的に取り組もうとする。 ②野菜作りの知恵や工夫・作り方を進んで聞いたり、調べたりしようとする。 ○思考・判断 ①野菜の成長を妨げる物への対処法を考えることができる。 ○技能・表現 ①野菜の成長過程で起こる問題について、調べたことを絵や文を使ってまとめたり、伝え合ったりすることができる。 ○知識・理解 ①大根の育て方について理解することができる。 ②地域の特色である農業に従事する人々が大根を育てるために様々な苦勞や工夫をしていることに気付くことができる。
12月～3月	3の1大根いっぱいできた!	収穫する大根の使い道について調べたり、聞いたりしながら、話し合っただけを実践していく活動を通して、様々な困難を乗り越え、協力して粘り強く栽培活動をしてきた達成感を味わうとともに、力を貸して下さったまちの方や自然の恵みに感謝し、まちのよさを再発見することができるようになる。	(生きる喜びの実感) ・身近な人や動植物の成長や死を実感し、生命あるものを大切にする。 (身近な地域社会へのかかわり) ・まちの文化や歴史などを調べることを通して関心をもち、身近な地域にあるもののよさに気付く。 (交流・ボランティア社会貢献) ・様々な交流を通して、相手の思いを理解し、自分ができることから実行する。	○関心・意欲・態度 ①大根の使い道について、調べたり、聞いたりしながら考え、積極的に取り組もうとする。 ○思考・判断 ①大根作りでお世話になった方々への感謝の表し方を考えることができる。 ○技能・表現 ①野菜の成長や自分たちの努力について、劇や紙芝居などでまとめ、楽しく分かりやすく伝えることができる。 ○知識・理解 ①自分たちに向けられた地域の人々の思いや願いを知ることができる。

【4年生】

月	単元	単元目標	内容系列表との関係	単元の評価規準
4月～7月	ワクワク三浦体験学習!	三浦体験学習に向けて準備したり、まとめたりする活動を通して、友達と協力することや活動を工夫したりすることの大切さに気付き、活動を楽しむことができるようになる。	(自分らしさの発揮) ・自分の好きなどころを見付け、夢中になったり伸ばしたりする。 (コミュニケーション能力) ・自分と友達の違いや似ているところに気付き、自他とよさを認める。 ・学校行事に進んでかかわり、その活動を通して仲間をつくる。	○関心・意欲・態度 ①三浦の環境やふれあいの村について進んで調べようとする。 ②5年生とも協力して計画、活動しようとする。 ③三浦での体験をもとに、劇で自分の思いを表そうとする。 ○思考・判断 ①計画を実行するために、どのような行程をたどればよいか考えることができる。 ②体験学習を振り返り、相手に応じて何をどのように伝えるかを考えることができる。 ○技能・表現 ①人から聞いたり、本で調べたり、インターネットを使ったりして三浦の情報を収集・選択することができる。 ②伝えたいことを意識しながら、相手に分かりやすく伝えることができる。

				<p>○知識・理解</p> <p>①三浦半島の位置や目的地への行き方、ふれあいの村の施設を理解することができる。</p> <p>②劇全体の流れを把握し、相手を意識した発表の仕方を理解することができる。</p>
9月 ～ 11月	作るぞ！ 平成の千秀新田	<p>田んぼの作り方について調べ、自分たちの力で田んぼを開墾する活動を通して、様々な困難を乗り越えながら、米作りの大切さや、まちの人の米作りに対する工夫や努力を理解し、まちに愛着をもつことができるようにする。</p>	<p>(身近な地域社会へのかかわり)</p> <p>・まちの文化や歴史などを調べることを通して関心を持ち、身近な地域にあるもののよさに気付く。</p> <p>(自然環境への関心)</p> <p>・町の自然環境にふれる活動を通して様々な事象があることに気付く。</p>	<p>○関心・意欲・態度</p> <p>①田んぼの様子に関心を持ち、進んで田んぼの作り方について調べようとする。</p> <p>②田んぼに愛着をもって、意欲的に作業に取り組もうとする。</p> <p>○思考・判断</p> <p>①米作りに対する工夫や努力について考えることができる。</p> <p>②課題が生じた時に原因を追究し、その解決方法を考えることができる。</p> <p>○技能・表現</p> <p>①自分たちの活動を相手に分かりやすく伝えるために、交渉したりまとめたりできる。</p> <p>○知識・理解</p> <p>①田んぼのできる過程や水利について理解することができる。</p> <p>②米作りの大切さや地域の人の工夫や努力を理解することができる。</p>
1月 ～ 2月	準備だ 平成の千秀新田	<p>春からの稲作に向けて自分たちの田んぼをさらに改良する活動を通して、先人の知恵や工夫に気付き、自ら意欲的に活動することができるようにする。</p>	<p>(自然環境への関心)</p> <p>・町の自然環境にふれる活動を通して様々な事象があることに気付く。</p>	<p>○関心・意欲・態度</p> <p>①さらに必要なことを見付け出そうと進んで調べたり活動したりしようとする。</p> <p>○思考・判断</p> <p>①先人の知恵や工夫について考えることができる。</p> <p>②自分たちの活動のまとめを伝えるための内容を考えることができる。</p> <p>○技能・表現</p> <p>①先人の知恵や工夫について調べることできる。</p> <p>②自分たちの活動のまとめを工夫して伝えることができる。</p> <p>○知識・理解</p> <p>①米を栽培していない時の田んぼの利用方法について、先人の知恵や工夫に気付くことができる。</p> <p>②米を栽培していない時の田んぼの利用方法が分かる。</p>

【5年生】

月	単元	単元目標	内容系列表との関係	単元の評価規準
4月 ～ 6月	思い出っぱいわたしたち	<p>三浦体験学習にリーダーとして参加する活動を通して、下学年の友達と積極的にかかわりながら、成長している自分に気付き、学校生活をより豊かにすることができるようにする。</p>	<p>(自然環境への関心)</p> <p>・「まち」や日本・地域などの環境問題について関心をもつ。</p> <p>(コミュニケーション能力)</p> <p>・情報を収集・分析し、身近な問題について見通しをもって考える。</p> <p>・学校行事を主体的に運営・実施し、その活動を通して異学年の仲間をつくる。</p>	<p>○関心・意欲・態度</p> <p>①三浦の環境や交通手段、ふれあいの村について進んで調べようとする。</p> <p>②リーダーとしての自覚をもち、4年生と協力して計画・活動しようとする。</p> <p>○思考・判断</p> <p>①計画を実行するために、どのような行程をたどればよいか見通しをもって計画を立てることができる。</p> <p>○技能・表現</p> <p>①人から聞いたり、本で調べたり、インターネットを使ったりして三浦の情報を収集・選択することができる。</p> <p>○知識・理解</p> <p>①三浦半島の位置や目的地までの行き方、</p>

	の 三 浦			ふれあいの村の施設について理解することができる。 ②集団生活での決まりを理解することができる。
4 月 ～ 3 月	お 米 か ら の お く り も の	稲作体験の中で米づくりに携わる人々との交流を通して、まちの人たちの稲作における工夫や努力を理解し、生命への畏敬の気持ちをもつことができるようにする。	(身近な地域社会へのかかわり) ・地域や我が国の文化について学び、身近な地域にあるものを大切にしていく。 (生きる喜びの実感) ・生命はかけがえないものであることを実感し、自他の生命を尊重する。 (コミュニケーション能力) ・自分のよさや可能性に気づき、それらをより高める。	○関心・意欲・態度 ①稲作体験活動に積極的に取り組み、地域の人に教わりながら協力して作業しようとする。 ②米づくりにかかわる取組について収穫祭をひらいたり、来年度のオリエンテーションを開く計画を立てようとする。 ○思考・判断 ①稲作を体験して学んだことを、毎日の生活に生かすことができる。 ○技能・表現 ①自分の目的にあった調査方法を選択し、必要な情報を収集することができる。 ②稲作について、自分が調べたことを相手に伝わるように方法を工夫しながらまとめることができる。 ○知識・理解 ①米作りに携わる人々の思いを理解することができる。
11 月 ～ 2 月	お い し い ぬ か 漬 け 大 捜 査 線 !	脱穀・精米の後、とれた「糠」の利用法について調べたり、「ぬか漬け」を作ったりする活動を通して、先人の食品を保存する知恵や工夫を理解するとともに“お米”のよさを改めて感じることができるようにする。	(身近な地域社会へのかかわり) ・地域や我が国の文化について学び、身近な地域にあるものを大切にしていく。 (コミュニケーション能力) ・情報を収集・分析し、身近な問題について見通しをもって考える。 ・自分のよさや可能性に気づき、それらをより高める。	○関心・意欲・態度 ①「米糠」を使って進んで糠床をつくり漬け物を作ろうとする。 ②自分たちの生活を振り返り、食生活を見直そうとする。 ○思考・判断 ①「米糠」の利用法を調べ、「ぬか漬け」づくりの計画を見通しをもって立てることができる。 ②「ぬか漬け」の味をよくするための改善点を考えることができる。 ③先人の知恵を当時の生活と関連付けて考えることができる。 ④日本の伝統的食文化と自分たちの生活を比べ、食生活の改善点を考えることができる。 ○技能・表現 ①「米糠」の利用法を自分なりの方法でまとめることができる。 ②「ぬか漬け」の作り方をまとめることができる。 ③「ぬか漬け」のよりよい作り方を地域の人に聞いて、自分たちの「ぬか漬け」づくりに生かすことができる。 ④「ぬか漬け」のよさを他の人にも伝えたいという願いをもち、自分なりの方法で説明することができる。 ○知識・理解 ①「ぬか漬け」の作り方が分かる。 ②「米糠」を使うと、食品を保存できることを理解することができる。 ③先人たちは、稲を有効に使ってきたことに気付くことができる。

【6年生】

月	単元	単元目標	内容系列表との関係	単元の評価規準
		わき水や井戸	(身近な地域社会へ	○関心・意欲・態度

<p>4月 ～ 10月</p>	<p>まちの水の秘密をさぐる</p>	<p>水について人とかかわりながら調べる活動を通して、自分自身のよさや、自分のまちの水のよさを再発見し、まちの水を自分たちなりに守っていくことを実践することができるようにする。</p>	<p>のかかわり) ・地域や我が国の文化について学び、身近な地域にあるものを大切にしていく。 (変化する地域社会へのかかわり) ・地域の特色に気付き、これからのよりよい地域社会の在り方について考え、働きかける。 (自然環境への関心) ・「まち」や日本・地域などの環境問題について関心をもつ。 (問題解決) 情報を収集・分析し、身近な問題について見通しをもって考える。 (コミュニケーション能力) ・自分のよさや可能性に気付き、それらをより高める。</p>	<p>①井戸水やわき水に関心を持ち、人とかかわりながら、進んで調べようとする。 ②めあてをもって、自分なりの方法で解決しようとする。 ○思考・判断 ①筋道立てて調べる方法を考えることができる。 ②データをもとに、比較・分類し、その根拠をもとに考え、判断することができる。 ③まちの水を自分たちなりに守ろうと実践することができる。 ○技能・表現 ①自分の伝えたいことを的確に表現し、解決することができる。 ○知識・理解 ①まちの水質について理解することができる。 ②自分のよさやまちのよさや課題を理解することができる。</p>
<p>11月 ～ 2月</p>	<p>ハンドインハンド 手を取り合って</p>	<p>障害のある人の生活や思い、取り巻く社会環境などについて自分なりの方法で追究することを通して、社会の中には様々な生活の中で、願いをもって懸命に生きている人々がいることや、障害のある人が、よりよく生きたいという願いを自分と同じように持っていることに気付き、共に生きる社会の一員として、自分自身のよりよい生き方を考え、実践しようとする。</p>	<p>(豊かな人権感覚) ・身の回りにある偏見や差別に気付くとともに、認め合い、支え合う。 (交流・ボランティア・社会貢献) ・様々な立場の人々の考えを理解し、社会に貢献する活動について考え、自分から進んでかかわっていく。 (生きる喜びの実感) ・生命はかけがえのないものであることを実感し、自他の生命を尊重する。 (コミュニケーション能力) 情報を収集・分析し、身近な問題について見通しをもって考える。</p>	<p>○関心・意欲・態度 ①障害のある人やお年寄りなどの生活の様子や思いに関心を持ち、その様子や思いを進んで調べようとする。 ②普段の生活を振り返り、周囲の人に対する接し方など、よりよい自分の生き方について考え、実践しようとする。 ○思考・判断 ①自分が学習してきた過程や内容、新たに獲得した事実などをもとに、学習の見通しをたて、追究することができる。 ②様々な人々の思いや願いにふれ、それを取り巻く社会の様子や改善点について自分なりの考えをもつとともに、自分の普段の生活を振り返ることができる。 ○技能・表現 ①学習を通して分かったことや考えたことなどを自分なりの方法で表現することができる。 ②学習したことを自分なりの方法で発信することができる。 ○知識・理解 ①障害をもつ人やお年寄りなどの思いや願いをとらえることができる。 ②施設や点字、補助犬など、障害をもつ人が豊かに生活できるようにするための工夫についてとらえることができる。</p>

《横浜市立老松中学校1年生の年間単元指導計画》

老松中学校1年生の年間指導計画は、次のような点が見られる。

年間を通して、3つの単元を設定しているが、自分たちの住んでいる「地域」をテーマに、一年間継続して活動している。テーマ型の年間単元計画である。

月	単元名	単元の目標	内容系列	評価規準
4月 ～ 8月	「西区と新潟を比較した学習発表会をしよう」	西区と新潟を比較して調べ、その内容を分かりやすく発表する活動を通して、自分らしさを伸ばすとともに、自分の住んでいる地域への愛着を深めることができるようにする。	・地域の生活の理解及び地域への愛着を深める態度の育成 ・まちの人とのつながりを大切にし、主体的に生き方を学ぶ態度の育成	○関心・意欲・態度 ①自ら進んで、意欲的に調べ活動を行おうとする。 ○思考・判断 ①西区と新潟を比較しながら、それぞれのよさについて考えることができる。 ②自分のまちを見つめ、問題点について考えることができる。 ○技能・表現 ①必要な情報を収集し、活用しながら自分の思いを表現することができる。 ○知識・理解 ①新潟と比較しながら、自分の住んでいる地域のよさや課題を理解することができる。
9月 ～ 11月	「西区再発見！自然教室を大成功させよう」	様々な体験活動や人々との交流を通して、自然に対する豊かな感受性をもつことができるようにする。	・様々な体験活動を通して、自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心等の育成 ・自己の心身の成長を実感し、他者との間の豊かな人間関係を築くことができる能力や態度の育成	○関心・意欲・態度 ①身近な自然環境や環境問題に関心をもち、問題を追究しようとする。 ②個性を自覚し、自分らしさを発揮しながら、自然教室に向けて意欲的に取り組もうとする。 ○思考・判断 ①人間社会の営みと環境問題の関係について考えることができる。 ②友達と積極的にかかわりながら、自然教室に向けての活動を工夫・改善することができる。 ○技能・表現 ①よりよく問題を解決するために、必要な情報を収集し、活用することができる。 ○知識・理解 ①環境問題と社会生活とのかかわりについて理解することができる。 ②自他のよさや可能性を理解することができる。
12月 ～ 3月	「西区再発見！みんなで考え、みんなで創る西区の未来！」	自然教室(新潟)の思い出アルバムのづくりを通して、環境への関心を高め、表現力を培うとともに、地域をよくしていきたいという意識をもつことができるようにする。	・地域の生活の理解及び地域への愛着を深める態度の育成 ・環境の保全やよりよい環境の創造のために主体的に行動する実践的な態度の育成	○関心・意欲・態度 ①地域をよく変えたいという意識をもつことができる。 ②自分から進んで、意欲的に活動に取り組むことができる。 ○思考・判断 ①友達のよいところ、学ぶところを進んで見付けることができる。 ②今までの自分と関連させて、地域の中での自分の在り方を考えることができる。 ○技能・表現 ①今までの学習の足跡を分かりやすく整理

			して表現することができる。 ②グラフを正しく読み取ることができる。 ○知識・理解 ①地域の諸問題について理解を深めることができる。
--	--	--	--

(4) 単元計画のフォーマットとその作成要領

単元指導計画は、第Ⅱ章第5節に示されたフォーマット及びその作成要領に沿って作成することにした。

すなわち、①単元指導計画の対象学年及び担当者の決定→②単元名及び学習活動の決定→③単元設定に関わる「教師の願い」の決定→④単元設定に関わる「子どもの実態」の記述→⑤単元の目標の決定→⑥単元の評価規準の作成→⑦学習過程における単元の評価規準の具体化と評価資料の決定→⑧評価資料(略)→⑨評価基準の設定→⑩評価の3つの機能への対応計画の決定の順に沿って単元指導計画を作成することにした。

以下、この中から工夫した点や留意した点などを、実際の取り組みを踏まえて記すことにする。

<① 単元指導計画の対象学年及び担当者の決定に関して>

対象学年や担当者名が分かるように記述することが大切である。本市実践校の千秀小学校においては、学級を母体とした活動のため、担当者名は1名(TTの場合は2名)、老松中学校の場合は、学年としての取組であるため、複数名が記述されている。

<② 単元名及び学習活動の決定に関して>

「単元名」については、その単元において子どもがどのような問題解決の方向性をもっているのか分かるような記述する。例えば「作るぞ!平成の千秀新田」(千秀小学校3年生)の単元のように、子どもが新田を作ることが、子どもの問題解決の活動であるということが分かる単元名の設定である。また、学習活動の計画に関しては、子どもや地域の実態等を念頭に置きながら、どのような問題解決の活動をどのくらいの時間をかけて展開するのか計画する。「作るぞ!平成の千秀新田」の例でみると、計画したことが「1-5 学習過程と評価計画」の中の「学習活動」及び「支援」の欄に具体的に記述されている。

<③ 単元設定に関わる「教師の願い」の決定に関して>

ここには、問題解決の活動の概略とその活動を通して育まれる子どもの望ましい生活像を記述する。その際に、今の子どもの生活像(実態)と学校として作成した「内容系列表」を参考にする。

例えば「まちの水の秘密をさぐる」(千秀小学校6年生)の中では、「まちの水に目を向け、市販の水の軟水や硬水と比べたり、水質検査などの科学的な比較分析をしたりして、まちの水の特質を明らかにしていきたい。」と活動の概略の記述がある。さらに、千秀小学校の内容系列表の中の「文化・歴史」の(身近な地域社会とのかかわり)(変化する社会とのかかわり)と「コミュニケーション能力」の内容に関連して、「実際の水を調べていく活動の中では、多くの問題とぶつかりそれを解決していく、いくつもの過程が考えられる。その過程で、人とのつながりや自己肯定感の高まり、コミュニケーション能力や創造力の高まりなどが見られるよう支援していきたい。(中略)水とい

う視点から自分のまちのよさを具体的に理解し、そして地域という学びの場で活動することを通して、まちが自分の原風景になるような、心の拠り所となる場所になってほしい。そしてまちへの愛着がわき、自分の子どもたちにまで思いをさせ、まちを構成する一員としての自覚が育ってほしい。」と、この単元を通しての子どもの望ましい生活者像の記述がある。

<④ 単元設定に関わる「子どもの実態」の記述に関して>

子どもの実態というと、「明るい子どもが多い。」とか「男女の仲がよい。」などとその集団の傾向を記述する場合があるが、この項には、「教師の願い」に記述された内容から見た子どもの実態を記述したい。つまり、この活動を通して教師が指導したい子どもの生活から見て、現在の子どもがどのような生活をしているかを記述する。

先ほどのわき水の例では、「家庭では、実際に井戸水を農業用水などに使っていたり、自分の家の近くからわき水が出ていたりして、数名の子どもにとっては身近なものと感じられているようである。」という実態の記述がある。すると、この実態は、指導者が意図している「水という視点から自分のまちのよさを具体的に理解し、そして地域という学びの場で活動することを通して、まちが自分の原風景になるような、心の拠り所となる場所になってほしい。そしてまちへの愛着がわき、自分の子どもたちにまで思いをさせ、まちを構成する一員としての自覚が育ってほしい。」という内容から見た子どもの実態となっていることが大切となってくるのである。

<⑤ 単元の目標の決定に関しては>

単元目標は、従来、観点別学習状況の4観点別に書かれたり、2文や3文で書かれたり、いろいろな記述の仕方がある。しかし、本研究では、「・・・ア・・・の活動を通して、・・・イ・・・に気付き、理解し、考え、表現し・・・ウ・・・できるようになる。」というように、1文で記述することとする。この方が、学校として作成した「内容系列表」との関連が図られ、指導者側の意図が見えると判断したからである。具体的にはアの部分には、活動を、イの部分には主に「思考・判断」にかかわる内容を、ウの部分には、期待する子どもの生活者像を記述する。

千秀小学校6年生の例で示すと「わき水や井戸水などについて人とかがわりながら調べる活動を通して、自分の地域の水を再発見し、わがまちにおける水と人との関係性から、まちの水に愛着をもつことができる。」というようになる。

<⑥ 単元の評価規準の作成に関して>

単元の評価規準は、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の4観点別に設定することとする。その際には、その単元の単元目標を実現するためには、子どもがどのような「関心・意欲・態度」をもち、そこで何をポイントに「思考・判断」し、その過程においてどのような「技能」を働かせどのように「表現」し、また、どのような「知識・理解」を得ることを目指すかが統一的に明らかになるようにする。さらに、それぞれの観点ごとの評価規準の数は、単元や観点に応じて、弾力的な扱いとする。ここに示した評価規準は、「すべての子どもがここまで学習実現してほしいという目標規準」としてとらえる。

例えば、老松中学校1年生の実践「西区再発見！みんな で考え、みんなで作る西区の未来！」という単元では、次のような評価規準が作成されている。

○関心・意欲・態度

- ①地域をよく変えたいという意識をもつことができる。
- ②自分から進んで意欲的に活動に取り組むことができる。

○思考・判断

- ①友達のよいところ、学ぶところを進んで見付けることができる。
- ②今までの自分と関連させて、地域の中での自分の在り方を考えることができる。

○技能・表現

- ①今までの自分の足跡をわかりやすく整理して表現することができる。
- ②グラフを正しく読み取ることができる。

○知識・理解

- ①地域の諸問題について理解を深めることができる。

<⑦ 学習過程における単元の評価規準の具体化と評価資料の決定に関して>

単元の評価規準の実現状況が、その学習過程の中のいつ、どこで、どのような方法で評価されるのかを構想し、その結果を「5. 学習過程と評価計画」の<評価規準>及び<評価資料>の欄に記述する。その際に、単元で作成した評価規準の丸数字をそのまま使用し、また、その実現状況を評価するための評価資料を記述する。さらには、作成した評価規準に迫るための支援の方策を必ず記述する。「指導と評価が一体化」という考え方からすると、これは当然のことである。なお、評価資料に関しては、どの子どもも同じ場面、同じ評価資料で見ていくために、一つの評価規準に対して評価資料は一つと限定する。

また、「1-6 評価基準」の欄に「学習活動における具体的な評価規準」を記述していく際には、一つの評価規準が、その学習過程の中で1回しかない場合は、単元作成時の評価規準をそのまま使用することにする。しかし、同じ評価規準を複数回にわたって使用する場合は、その学習に沿ってより具体的にすることが大切となる。

例としては、次のような例があげられる。

◎千秀小学校3年生の例「ようこそ！3の1グリーンファームへ！」

<単元の評価規準> (一部)

○関心・意欲・態度

- ①野菜の成長に願いをもち、栽培活動に積極的に取り組もうとしている。

学 習 活 動	評価規準	学習活動における具体的な評価規準	評価資料
1 大根の成長を妨げる虫の存在に気付く。	関心・意欲・態度①	虫の被害を確認するために、大根を注意深く観察しようとしている。	学習カード1
2 虫への対処法を考え、その後の栽培活動の見通しをもつ。	関心・意欲・態度①	虫への対処法などについて、課題にあわせて調べようとしている。	活動中の観察

<⑧ 評価資料（略）>

<⑨ 評価基準の設定に関して>

学習過程中に評価規準を位置づけたら、それぞれの場面で子どもの実現状況を判断するための評価基準を設定する。その段階（判断の尺度）については、小学校は3年生以上は、現行の目標に準拠した評価に沿い、A（3点）、B（2点）、C（1点）の3段階とする。なお、中学校に関しては、教科の評定は5段階であるが、今年度、本市としては中学校の総合的な学習の時間の評価に関する開発研究は初めての取組であることを考慮し、小学校同様3段階とする。

評価基準の設定に際しては、評価規準の実現状況を的確にとらえるために、子どもの具体的な姿で記述するようにする。

例えば、千秀小学校3年生の例では、次のような評価基準の設定が見られる。

学習活動	評価規準	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
				A（3）	B（2）	C（1）
3分かったことを基に、自分たちの解決策を話し合う。	思考・判断 ①	野菜の成長を妨げるものへの対処法を考えることができる。	学習カード2	話し合ったことを基に、理由を二つ以上あげて自分の考えを書いている。	話し合ったことを基に、理由を一つあげて自分の考えを書いている。	自分の考えを書いている。

ここに設定された評価基準は、「一つ」「二つ」など量的なものを示しているが、この学校ではこの中からさらに質的なものまで見ようと、事前に指導者がここで記述できたら望ましいと思われる理由を10項目程度もち、その中のものが「一つ書いたら」「二つ以上書いたら」というようにする。このような工夫をすることによって、単に量で判断するのではなく、量から質が判断できると考える。

<⑩ 評価の3つの機能への対応計画の決定に関して>

単元全体を通して、「指導と評価の一体化」、「子どもの自己学習力の向上に向けた評価の工夫」及び「保護者等外部への説明責任に向けた評価の工夫」という、3つの評価への工夫を統一的に構想することが大切である。なお、この具体的な進め方などについては、次の（5）で述べることとする。

（5）授業と評価の実践に向けて

①指導と評価の一体化に向けて

今回、集団に準拠した評価から目標に準拠した評価に変わったことで、「評価観」の転換が図られ、一人一人の子どもの学習過程の評価がさらに大事にされるようになった。いわゆる相対評価においては、テストの結果から集団の中での相対的な位置づけによって子どもの学習状況を評価することが多く、子どものつまづきの原因までつかめない場合が多々ある。従って、その結果からどのような指導が必要か、評価を通しての指導改善までは困難である。ところが、いわゆる絶対評価においては、一人一人の子どもがその目標に対してどこまで実現できたのかを評価していくため、子どもが学習過程のどこ

でつまづいたのか、その結果どのように指導を改善していけばよいのか、教師の問題解決と評価が一体化されることになる。これが、問題解決評価である。

指導の評価の一体化の流れを、報告書『総合的な学習の時間の授業と評価の工夫（第一次報告書）』（国立教育政策研究所、平成15年3月）においては、次のように想定している。

すなわち、指導と評価の一体化に向けた評価活動は、①授業の最初から最後まで絶えず営まれる活動であり、②その評価活動は予め作成した単元指導計画に基づいて実際の学習指導を行う→そのもとで児童生徒が学習活動を展開する→観点別の評価規準の実現状況を学習の過程及び成果に関する学習資料・情報を基に評価する→そしてその評価結果を基に、自己の作成した指導計画を予定通り継続するか、あるいは改善を加えるかを判断し、その後の指導に臨む→・・・といった一連のサイクルとして実践される。

このサイクルを具現化したものが、V-2から以降に紹介されている千秀小学校と老松中学校の「5 学習過程と評価計画」の部分である。この欄の中の「評価規準」とそれに対する「支援」及び「評価資料」は、この指導と評価の一体化の一連のサイクルを具体的な学習の中で想定したものである。

実際の指導と評価の一体化については、「学習活動における具体的な評価規準」の評価場面ごとに、その評価場面に至るまでの<（1）指導・学習の過程><（2）評価結果><（3）指導の改善と実施>の欄に記述してある。「5 学習過程と評価計画」に沿って計画的に指導と評価の一体化作業の足跡を記録しておくため、より客観的で継続的なものになっている。

千秀小学校3年生の「ようこそ！3の1グリーンファームへ！」の単元の学習活動1の実践の中で、この指導と評価の一体化の実際を見ると次のようになる。

学習活動1 大根の成長を妨げる虫の存在に気づく。

（1）指導・学習の過程

9月25日の種まき後、発芽するまでは順調であったが、それから5日後の観察で、子どもたちは、大根の葉に小さな穴があいていることを発見した。この時点での子どもたちは、「もしかしたら虫に食べられたのかもしれない。」と考えたものの、被害が少なく、実際に虫を発見できなかったことから、それほど事態を重く受け止めてはいなかった。

そこで、1週間後に今度は注意深く観察することにした。それぞれが虫眼鏡を持ち、1枚ずつ葉の裏側まで観察するように助言した。その際に発見できたものは、次のものであった。

- ・「モンシロチョウのたまご・幼虫」
- ・「マツカレハ」（ガの幼虫）
- ・「てんとう虫の幼虫」
- ・「ヨトウ虫」

被害は、予想していたよりも大きく驚かされたが、その分、子どもたちの問題解決への意欲は、十分に高められた。

（2）評価結果

10月15日（学習カード1）

評価の 観点	学習活動における 具体的な評価規準	評価結果		
		A(3)	B(2)	C(1)
関心・意欲・ 態度①	虫の被害を確認するために、大根を注意深く観察しようとしている。	9人	15人	6人

(3) 指導の改善と実施

評価結果A(3)が9人、B(2)が15人という結果から、観察の際、「たまごの数」や「幼虫の特徴・大きさ」などに着目するように事前に話したことが、より具体的な観察につながったのではないかと考える。評価結果C(1)の6人については、自分の大根は虫の被害を受けていなかったと主張した子どもたちであったが、再度虫眼鏡を使って葉の裏まで観察するように助言したところ、そのうちの4人は、虫やたまごを見つけることができた。残りの2人については、虫の被害を受けておらず、そのまま観察終了としてしまったのだが、この活動では特に自分の大根の観察だけにとどまらず、被害を受けた友だちの大根も観察するように声をかけるべきであったと反省した。

本実践の指導では、「大根の成長を妨げる虫の存在に気づく。」という学習活動の中で、その視点から子どもがどのような学習状況であったか(1)指導・学習の過程>で示した。最初の「虫に気付かない」実態から、教師が指導したことも明確に残されている。さらに<(2)評価結果>において、この活動における評価の観点、評価基準から実際に評価した結果を示し、<(3)指導の改善と実施>の中で、特にCと判断した子どもがどこにつまづいているのかを明らかにし、それに対する教師の具体的な指導について記述してある。また、子どもの様子から、教師自身の指導の在り方まで評価している。

まさに、このサイクルの繰り返しが指導と評価の一体化であるし、教師の問題解決評価である。

②自己学習力の向上に向けた工夫

既述の報告書『総合的な学習の時間の授業と評価の工夫(第一次報告書)』において、「生きる力」を育てる上から、教師の支援を得ながら、児童生徒の問題解決力を育てていくことの重要性が述べられている。具体的には、自分で学習目標を決め→そのための計画を立て→友達と協力しながら自己追究し、その問題解決の過程で絶えず自己の活動の過程及び成果を学習目標に照らして評価し→やがて解決に至るという自己学習力(ないしは自己評価力)である。

しかし、児童生徒が最初からこのような自己学習力を発揮できるとは考えられず、このため、報告書には次の二つのレベルにおける対応が示されている。すなわち、レベル1:教師主導のもとに児童生徒が学習活動及び評価活動を展開するレベルであり、レベル2:教師の支援のもとで、児童生徒が自己の目標なり評価規準を定め→その実現に向けた学習活動を展開し→その過程及び成果を振り返るレベルである。

レベル1に関しては、単元構想をする際、教師の問題解決授業の展開を工夫した。子どもが問題的場面で出会い、解決すべき問題を設定し、仮説を立て、検証し、まとめ、さらに問題をもちという子どもの問題解決的な単元構想及びその中での子どもの自己評価活動を大事にした。

千秀小学校においては、教師の問題解決授業を展開するために、次のような取組の工夫を行っている。すなわち、子どもがどうしても解決したくなる問題を生み出すため、①地域素材の積極的な開発を行い、②具体的な体験活動を積極的に取り入れる。また、③人物とのふれあいを大切にする(相手意識をもたせる)、④子どもの生活に根付いた問題を取り上げる、といった工夫である。

また、単元の指導過程においては、子どもの追究意欲を高めるために、子どもの興味

・関心を把握し、思考の流れに寄り添った学習展開を図るよう心がけている。教師が明確なねらいをもち、子どもの思考とのズレを修正しながら、子どもにとってできるだけ自然な形で学習の道筋をつけ、学習過程を組み立てていくことが、大切な支援の一つであるととらえている。

そのために大切にすることとして「子どもとの対話」という視点を考え、「対話」を「会話」「話すこと」だけといった狭い意味でとらえずに、学習ノートのみとりを通しての対話や、発言のみとりなど、子どもの様々な「学ぶ姿」をとらえ、それに応じた支援をすることで、子どもの思考を大切にすることを展開していきたいと考えたのである。

さらに、レベル1への対応として、授業中に実施する具体的な評価活動において次のような工夫が見られる。

ア 評価資料への教師のコメント、アンダーライン等の工夫をする。すなわち、単に「がんばったね。」「よかったね。」といったコメントではなく、教師の意図（評価規準）が伝わるような、具体的なコメントを記述する。アンダーラインについても、同様に、評価規準に照らして、意図的に引くことで子どもが目標に迫れるようにする。

イ 学習活動の過程や成果に関する資料・情報を、その評価結果とともに集積していくポートフォリオを授業中に活用し、学習のあとを振り返り事後に備えたり、授業終了時にまとめポートフォリオを作成する。評価活動を積み重ねていくため、自分の成長の跡が実感できる。また、保護者に対して、学年通信や、公開授業、学級懇談会の場などを通して、子どもの作成したポートフォリオを提示し、子どもの学びの意欲を高めていく。

ウ 学習カードへの記述を求める際、授業に先立って予めその学習カード等を提示したり、その評価基準を説明したりする。このことにより、子どもの目標が明確になり、目的意識も生まれる。

一方、レベル2における工夫については、例えば目標をもって自分たちの作品を作成し、その作品を相互評価することによって、作品を改善していくといった機会などを活用しながら、子どもが自ら目標を設定し（評価規準の内面化）、活動を展開し、その跡を振り返るといった評価活動が考えられる。

③外部への説明責任に向けた評価の実践

評価は、保護者、地域の人々等に対する説明責任を果たす機能がある。従来からある児童生徒指導要録や通知表はその典型である。また、最近は学校便りや学級通信、授業参観や懇談会、地域の教育力の活用、学校として教育方針や具体的な教育内容や方法まで含めた説明会等、様々な機会に多様な方法で外部に学校の教育について説明することが行われている。

総合的な学習の時間についても、児童生徒指導要録の記載は、教科とは異なり文章による表記ではあるが、子どもにどのような資質・能力が付いたのか、具体的な学習場面を通して、客観性や信頼性があり、かつ妥当性のある評価をし、その結果を説明していく必要がある。

このために、各単元においては、次のような2種類の評価の工夫をした。1つは、単

元における総括的評価であり、2つ目は個人内評価である。それぞれについて、以下のような工夫を行った。

< 単元における総括的評価に関して >

ア 各単元における評価結果を適宜残しておく。その際、例えば、のような千秀小学校5年生の場合のような「個人評価結果表」を、学習過程の展開に即して、順次、作成していくとよい。そうすれば、個人の評価結果はもちろんのこと、学級全体の様子も常に把握でき、その結果を次の指導に生かすことができる。

		学習活動1						学習活動2					評 定		
		①	②	③	③	④	④	①	②	②	③	③		④	⑤
A 児	関心意欲態度	2		<u>2</u>				2		<u>2</u>					B
	思考・判断		1			<u>2</u>					3		<u>3</u>		A
	技能・表現				<u>2</u>				<u>3</u>						A
	知識・理解						<u>2</u>					2		<u>3</u>	A
B 児	関心意欲態度	3		<u>3</u>				3		<u>3</u>					A
	思考・判断		3			<u>3</u>					2		<u>3</u>		A
	技能・表現				<u>3</u>				<u>3</u>						A
	知識・理解						<u>3</u>					3		<u>3</u>	A

(注) 総括的評価(評定)に用いた評価結果には下線を付した。評定は、総括的評価結果に基づき、Aは80%以上相当、Bは60~79%相当、Cは59%以下相当の達成状況を示している。

イ 次に、総括的評価に際しては、単元の指導過程において、4観点別の「単元の評価規準」の実現状況を複数回数以上評価する中の、いつ、どの場面における評価結果を総括的な評価結果として活用するかを計画を予め立てておく。

例えば、既述の「個人評価結果表」をみると、関心・意欲・態度と思考・判断の評価は計4回、技能・表現は計2回、知識・理解は計3回実施されているが、このうち、総括的評価においては、4観点ともに各2回の評価結果(下表のアンダーライン部分を参照)の総和が活用されている。

なお、総括的評価に際しては、指導者の指導の意図により、各単元に応じて柔軟に扱っていくことにした。

ウ また、最終的には文章記述で評価していくにしても、得点化しておいた方が都合がよいと考え、Aを3点(80%以上相当の達成)、Bを2点(60%~79%相当の達成)、Cを1点(59%以下相当の達成)と考えた。

< 単元における個人内評価に関して >

総合的な学習の時間の評価は、「児童生徒の一人一人のよさや可能性、進歩の状況を積極的に評価する」という個人内評価が重視されている。そこで、この個人内評価に備えて、2つの手法による評価を考えた。1つは、観点間経時的評価であり、2つ目は観

点内経時的評価である。

観点間経時的評価は、4つの観点相互の構造的な発達的特質をみて、児童生徒個々人の発達の強みなりよさや課題を明らかにしようとするものである。既述の「個人評価結果表」によれば、A児の評定は「B・A・A・A」となっているが、このような4観点相互の構造的な特質が、学習の過程においていつ形成されたのか、どのような発達の経過を辿ったのかなどを明らかにすることができる。

一方、観点内経時的評価は、学習の過程における評価の4つの観点それぞれごとの発達的特質をみれば、それぞれの観点における児童生徒の伸びや進歩の状況を明らかにしようとするものである。既述の「個人評価結果表」によれば、例えば、A児の関心・意欲・態度は2→2→2→2というように、学習活動全般を通じて2の発達の水準を維持しながら推移していることが分かる。また、思考・判断では、1→2→3→3というように、学習活動1のはじめのうちは1であったが、学習の進行につれ次第に2へ、さらには3へと伸び、それを維持しながら高い発達の水準のまま学習を終えていることが分かる。

なお、この例からも示唆されるように、私たちは、今回、個人内評価であっても、4つの評価の観点を活用することにした。中には、個人内評価だから、評価規準なり評価の観点を児童生徒個々人別に異なって作成しようと考えがちである。しかし、個々人別に評価規準がずれてしまうと指導がぶれるということになり、これでは、その単元で育てようとしている資質・能力が育たないことにもなりかねない。評価の4つの観点を基に個人内評価を行うことが大事である。

以上、「指導と評価の一体化」、「自己学習力の向上」及び「外部への説明責任」に向けた評価の考え方・進め方について検討してきた。それらの試みが、実際、各単元においてどのように具体化されているかに関しては、次からの各実践校の報告を参考にしていきたい。